
ボクの普通の物語

夢田之葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクの普通の物語

【Nコード】

N4680Y

【作者名】

夢田之葉

【あらすじ】

少年は普通を嫌っていた。

『普通でありたくない』と願いつつ、あらゆる普通と違うものを目指した。

しかし、いざ『普通じゃない自分』になった時に気付く。

普通になりたい。

これは、そんな、自分の感情に踊らされ続けた
普通の人間の、普通の過ちの物語である。

始まりは普通に自己紹介

「始まり」

ボクは普通ではない。

だからといって、別に特殊な能力を持っているわけでも、何かにおいて優れた才能もない。

アニメやゲームの主人公でもないんだから…

そんなファンタジーな理由で普通ではないのならば、きっとボクは空から女の子が降ってきたり、学校で突然の転校生！そして、ゆくゆくは…みたいな展開を心待ちにして生きていただろう。

いや、スポーツ漫画的に考えたら、突然の勧誘からのエースへ上昇とかか。

もしくは、ちよつと悲劇的なストーリー展開で、能力を妬まれたり、恐れられて、世間から拒絶や隔離をされたとしても、きっと近いうちに、自分が必要になる事件が起きて、それをきっかけにみんなのヒーローになれるのだろう。

きっと、自分の将来が明るく輝かしいものだと思じて生きていくことが出来たのだろう。

…少なくとも、こんな風に、劣等感で押し潰されて、憂鬱な気持ちになっていない事だけは、確実に言える。

普通への拒絶（前置き編）

「1」

最初に言っておくが、別に小さい頃から、自分が【普通ではない】と感じていたわけではない。

それどころか最初は、普通かどうかすら気にしたことがなかったはずだ…

ただ、当たり前に、いつも通りの生活を繰り返していくだけ…なんとなく生きていくだけの人間だった。

【なんとなく生きていくだけ】という言葉は、聞こえは悪いが、決してよくないものではなかった。

むしろ、今、こうして振り返って思い返すと

あの頃が、ボクの人生で最も幸せな時期だった気がする。

当たり前を当たり前前に受け入れられる。

そんな普通の事が、今のボクには難しい。

どうしても、これが当たり前なのかを考えてしまう。

それでは、当たり前前に受け入れられるはずがない。

「考えるな。」と思うから考えてしまつ。

わかつてはいるんだ。

でも、無理なものは無理

みんなだって、「今からパンティーの事を考えるな」と言われれば
パンティーで頭がいつぱいになってしまつたらう？

ちなみに、普通になるための一環として、パンティーが頭に浮かば
ない方法を考えた事がある。

これが出来れば、もう普通についてなんて頭に浮かぶことはない
と考えて…

その結論は、「パンティーが駄目ならスクール水着を考えればいい」
という方法なのだ。

こっちの考えが出来る人間は、どのみち普通ではないと思ひボツに
なりました。

誰か最も普通に、普通というものを考えない方法を知ってる人は
ないかな。

おっと、話がそれていました。

それでは、気を取り直して本題に移ろう。

今から書く話は、ボクが普通というものを失った原因

…普通というものを気にし始めてしまった、中学生の頃の話だ。

普通への拒絶（始まり編）

春の木漏れ日がダイヤモンドのように輝いている。

その光の暖かさで、ボクの緊張は少しだけほぐされた。

「おおー。今日から、ボクも中学生になるのか。」

ボクこと、さくら桜野 恒じょうは

この日、市立矢倉中学校の生徒となった。

中学校生活ってどんな感じなのだろう？

やっぱり、中学校どうしの争いだとか、突然の転校生だとかが現れたりするのかな。

…とにかく、ボクは期待に胸を膨らましていた

だが……何だこれは？

こんなの、今までと何一つ変わりのない、小学校も中学校も、結局同じじゃないか。

変わったのは授業の内容が難しくなったことと

恋愛の思考が淫猥になったことと

イジメの仕方が陰湿になっていることくらい。

そこに、ボクの求めていた理想は何も無い。

アクションもファンタジーも期待出来ない現実。

夢も希望も中途半端にしか期待出来ないリアル。

それが淡々と1ヶ月も続いたある日

「知ってるか？いくら魔法陣を書いても、何も召還出来ないんだぜ。」

「はあ？バカじゃないの？」

罵倒された。

中学校に入って1ヶ月。

俺は隣の席の女子に罵倒された。

「あんた…もしかして、電波さん？」

「違いますがな…人間の悪い。ただ期待してみただけだ。」

こいつの名前は桐沢きりさわ 優奈ゆうな

入学初日からずっと隣の席だ。どうやら、先生のやつ席替えの事を忘れてやがる。

まあ、別に仲が悪い訳ではないからいいが…

「ところであなた、部活とか入らないの？」

「そのあんたっていうの、やめない？」

「じゃあ、桜野だからサクラちゃん？」

それは、もっと嫌だ。

問答無用で却下に決まっている。

「それで、このまま部活に入るつもりはないの？」

「んー、部活はめんどくさいからいいや。」

「なんでなんで？クラスの人、みんな入ってるんだよ。」

知らねーよ

「特に好きなスポーツとかないし。」

「やってるうちに好きになってくるものらしいよ。」

知らねーよ

「とにかくやるうよ。クラスで部活に入っていないのあんただけになつちゃうかもよー。」

「知らねえよ！！…つつうか、なんでみんな入ってるからって俺も入らないといけないんだ？」

「ここがこいつの苦手なところで、みんなと同じである事が正しいように語ってくる。」

「みんなと違っている事が間違っているように語ってくる。」

「別に違ってもいいじゃないか…普通ってそんなに大切なのかよ。」

…きつと、この頃からだろう。

ボクは普通というものを意識し、普通を嫌い初めた。

しかし、一つだけ言わなければならない。

普通を嫌い初めたのは

優奈の影響もあつたが

主な原因は自分の偽善心

自分みたいな世間一般と外れた考えをもつ人間が

普通という概念のせいで

否定されるなんておかしいという思いが原因である。

つまり、今から始まるボクの普通への拒絶は

ボクにとっては普通という見えない壁との戦いであり

これを打ち破ることで、みんなが自由に幸せに暮らせると信じた救えないヒーローの物語なのだ。

普通への拒絶（踏み出し編）

「始めまして。ボクは桜野 恒といいます。」

結局、ボクは優奈のやつに言いくるめられて…

…いや、言いくるめるといふより実力行使だったような。

まあ、どちらにせよ

結論は変わらない。

…ボクは部活に入ることになった。

何の部活かというと
テニス部である。

ちなみに、なぜテニス部なのかというと…

「おー、コウ…だっけ？優奈から聞いてるぜ。俺は佐々木 雅樹。
よろしくな。」

「えっと、よろしくお願いします。」

「そんな堅苦しくなるなよ。ほら、同じ一年生だぜ？」

こいつの名前は笹々木 雅樹。
優奈の友達で、同じ一年生である。

つまり、優奈いわく「知ってる人がいたほうが心強いでしょ？」という理屈でこの佐々木 雅樹という男と同じテニス部を選ばされたのだ。

……俺の知り合いではないんだが。

佐々木 雅樹は見た目は少しチャラチャラした印象で制服は少し手を加えられていて、髪には少し茶色が入っている。
ちなみに、話によるとスポーツ万能で頭もいいらしい。

…まあ、つまりは、みんなの学校にも1人くらいはいるだろう。チャラチャラしているくせに頭がよくて運動が出来るやつ。

それがこの佐々木 雅樹だ。

でもそこまで悪い人ではないようで、今ボクにラケットの振り方を教えてくれている。

「えっと、こんな感じですか？」

「あー、ちよつと違うかな。たぶん持ち方が悪いのかもしれない。」

「ちなみに、佐々木さんはいつからテニスしてるんですか？」

「ああ、呼ぶときは雅樹でいいぜ。…えっと、俺も中学デビューなんだ。」

「えっ、うそ？」

「あつ、でも、打ち方は結構わかってるぜ。練習したからな。」

ああ、さすがスポーツ万能の方は違うなあ。
もはや、何もかもが完璧じゃないか。
俺もこんな風に生まれていたら……

「あつ、そうそう。お近づきのプレゼントとして一つ、いいこと教えてやる。」

「えっ、なんですか?」

「うちの学校の近くに小学校があるだろ?」

「ん?ああ、ありますね。南川小学校でしたっけ。それがどうしたんですか?」

「その三春先生つてのがヤバいくらいかわいいらしいぜ。」
……………えっ?」

「なんかよお。黒いスーツ着てるんだけど、それがマジで似合っていてさあ。もう、靴とかハイヒール履いてるんだぜ。狙いすぎだろ?…いや、もちろん自分のにはOKだぜ。セオリーに俺のアソコとか踏んでくれないかと切に願っちまうくらいにな。でもよ…どうせならポピュラーな居残り授業を希望!!手取り足取り、いろんなことを指導してもらいてえぜ。…いや、マジで、本人を見ればこの気持ち、お前もわかると思うぜ。だが、もし惚れても、お前に三春先生は渡さねえからな!!」

「あ、あの…。」

「いや、わかっている。この学校にもかわいい先生はいるよな。保

健室の岩城先生も素晴らしいし事務室の生田先生も美しい…。でも！
そんな常識を覆すほど三春先生はかわいいんだぜ！！」

…ああ、さつきまで『自分みたいな世間一般と外れた考えをもつ人間が普通という概念のせいで否定されるなんておかしい…』なんて思っていたはずなのに、すでに揺らぎそつだ。

いや、いけないな。

やっぱり、まだ自分は普通という概念にとらわれているのさつ。

よし、決めた。

今から俺の目標は

『佐々木 雅樹を否定しなくなるくらい普通ではなくなる』だ。

佐々木 雅樹君。

君のその理解を越える性癖をボクは受け入れてみせよう。

……さて、俺は何をすればいいのさつ？

普通への拒絶（踏みとどまり編）

「やっぱ、気になるんだろ？お前も好きだねえ。」

「いや、違いますよ。」

「はいはい、わかったから威張るなつて。」

だから、威張つてねえよ！…とか言っても聞いてくれないだろうか
ら、ボクは反論を止めた。

ボクは雅樹と一緒に

例の三春先生を見に行くことにした。

「おい、コウ。もう着いたぜ。」

「あつ、本当だ…つて、おいおいおい！何やってんだよ!？」

小学生に到着するやいなや、さも当たり前のように雅樹は小学校の
運動場を覗き始めた。

「何つて…先生を探してるに決まってるんじゃない。」

いや、それでもこれは、さすがに通報ものだろ。

…いや、否定するのは間違っているか。別に教師や小学生に危害を
加えているわけでも、ましてや盗撮をしているわけでもない。

ただ、ちょっと見ているだけである。

よし、こいつの性格を受け入れ初めている。

自己判断で普通ではないなんて否定をしていない。

「ほら、あそこにいるポニーテールの人。あれが三春先生だぜ。」
俺が、少しだけ普通という概念に打ち勝った気がして、少し喜びを感じている間に雅樹が三春先生を見つけ出したようだ。

「あの、ぷるつとした唇にキリツとした目が作り出す魅惑の微笑み。そして、Eカップを越えるであろう、圧倒的な存在感を放つ巨乳。そして、なにより、あの黒いスーツとハイヒールが大人の色気をさらに引き立てていて、さらにかわいらしさを際立たせるだろ？」

「いや、なんとというか、あれはかわいいってジャンルじゃなく、クールビューティー…カッコイイって部類の気がする。」

威圧感を感じるほどの目力だし、微笑みには哀愁を感じて、可愛らしさは一切感じない。

そして、衣服もスラッとしたスタイルに、気品を感じる黒いスーツとハイヒールなので、かわいいと思える部分はどこにあるのだろう。でも、感性は人それぞれだよな。

「ああ、何度みても惚れてしまうぜ。」

それに…なんだかんだ言って、偏見を無くしたらまともで一途な片思いじゃないか。

なんか、先生を好きになるってのは、やっぱり普通のことなんだな。

前までは、可笑しな事のように感じていたが、こうやって見ていると、逆に先生との恋を否定している人達の方が可笑しく思えてくる。

…やはり、一般人の普通という概念はくだらない。

「…本当に、雅樹は三春先生が好きなんだな。」
-沈黙-

ふっと雅樹を見て見た…

荒い呼吸。目は真剣に三春先生だけを見つめている。

……あれ？

なんだ、この違和感。

こいつに感じた普通と違った雰囲気。

別に、ただ教師を好きならば、全然理解が出来るようになったが、

雅樹から感じた雰囲気は

もっと理解を越えるものだった気がする…

……そういえば。

疑問を感じたボクは無我夢中に三春先生を見つめる雅樹の目を覚ますために

雅樹の顔の前で手を振った。

「わっ！…ああ、なんだコウかよ。脅かすなって。」

「……なあ、なんで真つ先に運動場を探したんだ？普通なら職員室だろ？」

「ああ、…だって、三春先生は大抵、この時間だと、運動場で部活動してる生徒を静かに眺めるのが日課なんだぜ。」

なるほど。

「どうやら、サッカー部の顧問になれなかったのが悔しいんだろうな。」

胸に引つかかった違和感が。

「まだ教師になって一年目の新米だから何も言えなかったのかな…。それとも、サッカーは好きだけど、別にうまくないことを気にしているのかな？」

今、わかった。

「でも、俺は知ってるよ。家の近くの公園でサッカーの練習をしているのを。」

「ああ、かわいそう。俺が抱きしめてあげたいくらいだぜ。」

「俺が、ずっとそばにいてやりたい。俺が心の支えになってやりたい。」

「ごめんな。勝手にペラペラしゃべって。…でも可愛いさは伝わっただろ？…彼女、見た目はカッコイイけど、心はか弱い女の子なんだぜ。」

笹々木 雅樹は生粋の

ストーリーカードだった。

普通への拒絶（ 苦悩編 ）

…カタカタ…カタカタカタカタ…タタ
「はあ…、」

ボクはパソコンの画面を覗いた。

そこには

【平成12年11月
ストーカー規制法制定】
と、書かれている。

「やっぱり、犯罪行為だよな…。」

あの日、雅樹がストーカーに近い存在だと悟った時…

恥ずかしながらボクは

「見たいアニメが始まってしまっ。」と、適当な言葉を残し、逃げるかのように帰ってしまった。

それにしても、もっとマシな言い訳は思いつかなかったのかな…

それはさておき。

「さあ…、これからどうしたらいいものか。」

今、ボクが何を悩んでいるのかというと
どのように雅樹と顔を合わせればいいのかではなく

もちろん、

ストーカーを否定するか否かでもない。

「どのように、ストーカーを理解すべきか」である。

しかし、最初に言っておくが、ボクは犯罪行為の理解する気はないし、肯定をする気はない。

これは、普通という概念にとらわれているとか、そういった類ではない。

どのような考え方をしてもかまわないが、
決して他人に迷惑をかけてはいけないとボクは思っているからである。

つまり、今回

ボクはストーカー行為の理解をするし、肯定もするつもりだが

ストーカー行為によって被害を与えるような事だけは否定するつもりだ。

そこで、先ほどの「どのように、ストーカーを理解すべきか」という悩みが生まれる。

ストーカー行為が犯罪であるからには、下手な理解の仕方は出来ない。

万が一、理解の仕方を間違えて、犯罪行為まで肯定し始めてしまったらお終いだ。

しかし、中途半端な理解をしても、何の意味もない。

やるからには、本格的にストーカーの気持ちにならなければいけない。

そうすることで、やっと雅樹を理解できる。

そして、「普通じゃないから」などの、偏見的な考えではなく

ちゃんとした意見を持って犯罪行為を抑制させられる人間になれる。

そのためにもストーカーの気持ちを…

全てを知りたくなる程、人を愛する気持ちを

どうにかして
理解しなければ。

「ああ、悩んでいても始まらない！」

自分に言い聞かせる。

自分を追い込む。

自分に問いかける。

キミは、どうすればいいのか…

ボクは、どうすればいいのか…

その答えは…

「そつだ、漫画を読もう。」

普通への拒絶（雑談編）

「優奈は少女漫画を読んだことありますか？」

「ん？…ああ、あるわよ。小さい頃にだけ」

今日は、朝から全校集会という、体育館で校長直々のありがたーい（？）言葉を聞けるというイベントがあり

今は、その真っ最中で、

ボクは、校長先生の

素晴らしい言葉の数々を

しっかりと聞き逃しつつ

優奈と話しをしている。

もちろん、体育館でも

優奈の位置は隣だった。

「少女漫画って、素晴らしいですよね。」

「そうね。」

「昨晚なんて、ずっと読んでしまっただけですよ。」

「……。」無言。

あれっ、なんか悪いこと言った？

…ああ、もしかして

ただ単に、男のくせに少女漫画かよ…とか思ってる？

そんなことを考えているうちに、優奈は口を開いた

「あんだ…、無理してない？」

…へっ？

あまりに想定外な言葉に

僕の思考は完全にストップした。

「あつ、ごめんごめん！その…、なんていうか、ちよくちよく敬語
混じりで話してくるじゃん？……だから！その…」

もしかして、ボクがわざわざ無理してまで敬語を使ってキャラ作り
してる…とか思われてる？

「いや、無理に敬語っぽくしてるわけじゃないですって。これは、
クセみたいなもので、……なんか、気持ちに余裕があると、ついつ
い敬語混じりになっちゃうんですよ。」

大体、無理してこんなキャラ作りするわけねえよ。

きつとボクをこの世に生まれさせた神様みたいな奴が、こんなキャラ
ラ付けしやがったんだろっな……恨むぞ。

「あはっ、なんだ…そういうことか。」

疑問が解決したからか、優奈はとても楽しそうに笑ってる。

「…まったく、人の変わったクセについてあざ笑うのはどうかと思
うぜ。」

「あつ、今のは敬語じゃない！」

「…だから、どうした。」

「そういえばさ…笹々木もあんたの事、よそよそしいって言ったよ」

「ありゃあ、初対面だからだよ。つつつか、雅樹の奴が馴れ馴れし過ぎるんだつつつの。」

ああ、そういや…

「なあ、優奈と笹々木 雅樹ってやつとどつという関係なん？」

「んっ、そこ…気になっちゃういますか？」

くそっ、にやけ顔がかなりム力つく。

「いや、ほら。雅樹って一般から見たら『普通』じゃないだろ？」

「あんたに言われたらお終いだけどね。」

「優奈はさ、あの性格をどう思ってるん？」…こんな疑問を抱く時点でボクはまだ、普通という概念に捕らわれているのだろう。

…まあ、だからこそ、ボクはここで優奈に質問をしたんだけど。

なぜなら、優奈と意見を交わすことによって、普通という概念に捕らわれた状態を客観的視線で感じたり考えることが出来るから。

「やっぱり普通じゃないわよね。」
予測通りの答え。

そして、ボク予定通りの質問をする。

「どこが『普通』じゃないと思うの？」

「相手とあまりに年が離れてるじゃない。少なくとも20歳以上でしよ。普通なら同学年とか…ギリでも先輩か後輩にでも恋するのが普通だと思わない？」

「でも、今じゃ年の差結婚とか普通じゃないですか。」

「それは大人だからよ。中学生の恋愛としては普通じゃない気が…。」

「恋愛に年の差なんて関係ないですよ。」

「あんだ、また敬語に…いや、いいわ。とにかく笹々木は、それだけじゃないのよ。」

…そう、そこだよな。

「ストーカー…なんですよね。」

「何よ、知ってたの？」

「そりゃ、知ってますよ。」

「だったら、話し合うまでもないじゃん。」

「いや、それもふまえてどこが『普通』じゃないのかを聞いているんですよ。」

「そりゃあ、気持ち悪いじゃない。」

「気持ち悪い…ですか。」

「考えてみてよ、好きでもない人がしょっちゅう近づいてきたら、そりゃあ、いい気がしないでしょ？」

「じゃあ、好きな人なら平気なんですか？」

「……普通なら…嫌なのかもしれないわね。」

「……なんかハッキリしない返事だな。」

「優奈の意見が聞きたいんですよ。優奈なら、好きな人にストーカーされても平気ですか？」

「…別に私なら。」

「好きな人から、数時間ごとにメールが来ても？」

「……うん、まあ。」

「好きな人の部屋が、優奈の写真で埋め尽くされていて？」

「……。」

「好きな人が優奈の家を眺めていても？好きな人が優奈の部屋を盗聴しても？好きな人が秘密にしていたことまで知っていても？好きな人が…」「うるさいなあ…！」

「そこ、静かにしなさい！」

ついに校長が怒った。

…それからしばらくボクらは何も言わなかった。

いや、別に校長に怒られたから何も言えなくなった訳ではない。

さっきの優奈の一言が『怒った』というより『拒絶した』感じがし

たからである。

長い朝礼は終わり、教室に帰る途中

さっきの話なんだけど……と、優奈が声をかけてきた。

「どうかしたの？」

実際、少し気まずかったが

だからといって、話題を始めた側として無視もできない。

「私は、別に好きな人からならば大丈夫だと思うのよ。」

「そうなんだ。」

「その、…あんたはどうなのよ。」

「はあ？」

「だから！…好きな人にストーカーされるのって嫌？」

……ボクが好きな人にストーカーされたらねえ。

「あー、それは嫌に決まってますね。」

「そうなんだ…。」

そりゃあ、嫌だ。でも…

「でも、ストーカーが普通かどうかとは話しが別だと思えますね。」

「えっ、どういう意味？」

「とりあえず、教室に戻ってからゆっくり話しましょう。」「…って
なわけで、話しの続きは教室に帰ってからになった。」

普通への拒絶（理屈編）

教室に戻ったボクたちは
自分の席に座った。

すると優奈が

「…それで、さっき言ってた『ストーカーが普通かどうかとは話しが別』ってどういう意味よ？」と、改めて聞き直してきた。

「ああ、…その前に一つ質問です。優奈はイナゴを食べた事ありませんか？」

「イナゴ？食べるわけないじゃん！……ってか、そんな話し、今は関係ないでしょ？」

「実は関係大ありなんです。知ってます？イナゴの佃煮って美味しいらしいんですよ。」

「ふーん…その話、本気にさっきの話と関係あるのね？」
「はい。」

優奈はまだ納得していないようで数秒間なにかを考えていたが、考えてもムダだと諦め、ため息を一つついた。

「まあ、いいわ。…んで、ちなみにあんたは食べたことあるの？」
「ないです。」

ないのかよ！…っと鋭いツッコミ（というよりも鋭い裏拳）を受け

た。

つつつか、この痛さはわざとではないだろうか。

「うぐつ…と、とにかく、優奈が食べない理由って何ですか？」

「そんなの、グロいからに決まってるでしょ？あんたは違うの？」

「ボクも同じです。見た目が苦手で食べられない…でも、ボクら人間はイナゴを食べられるんですよ。」

「まあ、そう…みたいね。」

「つまり、イナゴもストーカーも同じ。ボクは確かにストーカーされるのは嫌だと感じます。ですが、だからといって、ストーカーをしないといけないと否定するつもりはありません。」

人間はストーカーをしてもいい…人間がイナゴを食べてもいいのと同じように。」

「あー、わけわかんないけど…ようするに、あなたの感情的には否定するけど、一般論としても否定するつもりはない…ってこと？」

「むしろ、一般論としてのストーカーまで否定するのは間違ってるって言いたいんです。ただボクが嫌いなだけ。」

説得力ないわね…とつぶやき、優奈は蔑んだような感じの顔でこちらを見つめている。

「ん？なんですか。」

「…はあ、なんだかんだ言っても、あんたはイナゴを否定してるわけじゃない。…それじゃ、いくら理屈を並べても説得力がないわよ。」

確かに、全くその通りだ。

イナゴが食べられるなんていくら思っけても

結局食べられないのは、イナゴを食べ物として考えてないからだ。

イナゴを食べるのが普通じゃないと軽蔑する気持ちがあるからだ。

そんなやつがいくら語ったって、説得力なんてあるはずがない。

本当に理解しているなら、受け入れられるはず…

本当に否定する気持ちが無いならば…

ストーカーを否定する気持ちが無いならばストーカーされるのが嫌ではないはず…

「そうだよな。」

「えっ？」

「否定する気持ちはまだ残ってるんだよな…。」

「まあ、そうかもね。「うんうん…」と優奈は相づちを打つ

「だから、少女漫画なんだよ。」

「はっ？」優奈の相づちが止まる

「だからボクは、少女漫画にハマってみた。」

普通への拒絶（解説編）

ボクが何故、少女漫画にハマったのか。

その経緯について話そう。

……まず、『ストーカーを理解するには、どうすればよいか』を考
えていた。

しかし、なかなか思い浮かばない。

そこで『どうして、ストーカーを理解出来ないのか』を考えてみた。

すると『それは、きっと心のどこかに、ストーカーに対する拒絶感
があるからだ』と気がついた。

なので『ストーカーに対する拒絶感を無くす為にはどうすればよい
か』を必死に考えたところ

『そういえば、よく小説や漫画でヤンデレっているよな』と気がつ
いた。

ヤンデレというのは、病むほど人を愛し、ものによっては、主人公
の友達さえも殺したりする性格のことで、ストーカーに限りなく近
い部類である。

まあ、ボクはヤンデレをそこまで愛しているって訳ではないけど

そこで、ふっと考えた。

『…なんでヤンデレって、あんなに狂气的な性格をしているのに、それを求める人が多いのだろう』

『そこには、何か秘密があるのかもかもしれない』

『その「何か」ってなんだろう』

きつと、その「何か」ってのは強い愛情も含まれているのだろうけど

おそらく、それだけではないはず。

それだったら、恋愛小説や恋愛漫画のヒロイン集団、全てを好きになるはずだ。

あいつらは「愛」の理想を具現化したようなものだからな。

あいつらには無い「何か」がある。

ヤンデレにしかない「何か」がある。

それがわかれば、ストーカーに対する拒絶感の打開策が見つかるかもしれない

そして、それは案外、早く見つかった。

：いや、見つかったっていう言い方は悪いかもしれない。

ボクは、「これが真実だ」なんてほざく気も、「これしか有り得ない」なんて思い込む気もない。

あくまでボクの仮説だから。

しかし、ボクの中では的を得たものであった。

それはちょうど、部屋にあるテレビから流れてきた言葉がきっかけだった。

“『吊り橋効果って知っていますか？』”

その番組は、心理学を使って恋愛を上手くいかせようって内容で

この「吊り橋効果」とは、普通の場所よりも、吊り橋の上など安全とはいえない場所の方が告白が成功しやすいことから名付けられて

おり

その理由は、吊り橋の上にいるという恐怖からのドキドキを、告白されてドキドキしていると勘違いするかららしい。

『これがヤンデレならではの「何か」ではないか』と思った。

あの禍々しい行動の数々に対し、恐怖してドキドキしているタイミングで愛の言葉をぶつけられる。

完全に吊り橋効果ではないか。

…感情を勘違いしているからヤンデレが好きになる。

それはつまり、『感情を勘違いさせれば俺もヤンデレが好きになることが出来る』ということであり

『感情を勘違いさせれば俺もストーカーを好きになることが出来る』という仮説につながった。

しかし、感情を勘違いさせるといっても、ボクに愛を語ってくれる人間はいない。

『では、どうしよう』

そこで一つのアイデアがひらめいた。

『ボクの感情を勘違いさせるために、ボクは自分の感情に嘘をつこう』

つまり、ボクが行おうと試みているのは、ストーカーをいいものであると思いきませる…つまり、自己暗示である。

ストーカーは綺麗だ。

ストーカーは輝いている。

ストーカーは純愛だ。

ストーカーは素晴らしい。

そう思うことが出来れば簡単だ。

しかし実際、そう簡単にはいかない。

しかし人生、経験つてのが大切で『…あつ、そういや、そう思いきませるものがあつた。』

それは、ボクが小さい時になんとなくで読んだもの。
少女漫画。

とある漫画では、女が、冬の寒い中、恋する人を待ち伏せして待っている姿を綺麗に描き、その女を輝かせてみせる。

また、とある漫画では、男が好きになつた人を四六時中眺めたり、無理やり遊びに誘う姿を純愛と唄い、その男を素晴らしくみせる。

「つまり、少女漫画に影響を受ければ、ストーリーカーを受け入れることは容易い事なんです。だからボクは、少女漫画にハマってみました。」

……と、優奈に説明したところ、鼻で笑いやがった。

普通への拒絶（解説編）（後書き）

すみません。

しばらく休みます）、・・・（ニョローン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4680y/>

ボクの普通の物語

2012年1月12日23時45分発行